批評・紹介

文字の文化史

藤枝晃著

昭和四十六年十月　東京　岩波書店
B6判　二八〇頁

本書が「文字の文化史」を表題とすることには、大いに意味がある。これは單なる「文字學」あるいは「文字學史」ではなく、また「書道史」でもない。そして記述の大部分は漢字についてであるが、ただ「文字の」と題するのは、第十二章「漢字の周邊」において、突厥文字その他七種の漢字とは違った諸民族の文字にも及んでいるからである。

本書のめざすところが何であるかは、著者の「あとがき」に明言されている。「ふつうの書道史と、歴史や文學、哲學ないし書誌學などとの間」にある「廣大な領域」が、本書における著者の研究の對象であり、「寫本の材料やかたち、その本の作られ方、しまわれ方、よまれ方など」「書物の内容以前のことがら」が、おもな問題となる。それらは、集約すれば、著者が第十三章で、少しく觸れている「中國の古文書學」の基礎となるべきものである。つまり、ここでは、文字學で取り扱う字形とその由來、字體とその變遷など、また書道史で問題とする書體の變化、書風の相違などについて述べるのではなく、文字が書かれた材料やそれを書くのに用いられた道具そのものが論ぜられる。材料と道具のちがいが、ちがった書風と書體を生む要因である。「書道史」ではないから、有名な書家の作風についての記述も議論もない。第九章の「北鹿南兎の說」は、たぶん著者得意の論の一つであろうが、書道史上おなじみの南北朝の碑刻法帖の名は出てこない。著者は個人よりは集團を、流派よりは歴史の流れに重きをおく。本書は中國古文書學への試みであると同時に、書（あるいは書道）の美術考古學的考察を合わせたものだと言えるであろう。しかも技術史、廣くして言えば文化史學の觀點から論が進められているのだから、やっぱり「文字の文化史」という表題は動かすことができない。

本書が取り扱う諸問題は、これまでも部分的には、考古學者・文字學者・古文書研究家・書誌學者および書道史家などに、いくらか知られていた事實を手がかりとしてはいるが、このように展開した學者は未だ無かった。もともとシナ學者または東洋史學者よりは、もっと廣い讀者のために書かれたのだから、細かな論證はおおむね省かれているけれども、論調は極めて明快で、いささかの澁滯もなく、讀後さわやかさを感ぜしめるのは、著者の學問の博通と精識によると思われる。著者の新領域開拓の功績は、まことに大きい。著者が今年、フランス學士院よりスタニスラス・ジュリアン賞を受けられたのは、本書の刊行を機縁とすると言うのは、ゆえあることである。

全書十六章。漢字書寫（刻鑄）の材料に卽して大まかに分ければ四つの時期になるであろう。

A、金屬（銅）または石・骨などの時代
B、竹簡・木簡の時代
C、紙の時代
D、印刷の時代

第一（A）の時代は先秦であるが、ここでは便宜上、第四章に述べてある秦の統一王朝までをふくめておく。ここまでだけで約二千年以上の長い期間である。漢字の字體で言えば、甲骨文と金文および篆書（大篆・小篆）が用いられた。從って、これまで考古學者・古代史家と文字學者が力をそそいで研究してきた古器物の銘文と甲骨の刻文などが、おもな對象となる。

殷代の甲骨文は中國最古の文字として知られる。しかし、そのころすでに金文もあった。青銅器の銘文である。硬い直線から成る甲骨文と、軟かで「流麗な」線でできている金文。この二つの書體の同時並存は、ふしぎなようだが、著者によると、甲骨文は「堅くてツルツルした龜の甲や獸骨の上に」ほられたし、銅器の銘文はその器が作られるときに鑄造されたもので、鑄型の原型である粘土に「ヘラ一丁で」文字がほりこまれた。すなわち、書體の違いは、龜の甲や骨などと粘土との材料の質の違いによって生じたわけである（三八～四一ページ）。なるほど、そのとおりだが、評者の如き、言われてみるまで、全然氣がつかずにいた。金文をほる（銅器鑄造のやりかたを評者は知らないし、藤枝氏も本書で具體的に說明していないから、かりにほると言っておくが）そのための道具（これもヘラの類であろうが）が出土したことは聞かない。しかし甲骨文を刻みつけるのに用いたらしい道具が、殷の都あとの出土品にあるという（二四ページ）。今日の篆刻家などの使う小刀とは別の三角のみだそうである。このように今までの文字學者がほとんど考慮しなかった材料と道具が問題として取り上げられた處に、著者の鋭い眼光がひらめく。

ただし甲骨文も、甲骨に刻みつける前に、筆を用いて墨書したものであることは、文字を墨書しただけで刻んではない骨が發見されたことによって知られる。故董作賓氏の文を評者は中央研究院（歷史語言研究所）の「集刊」（？）で讀んだ記憶がある。後世（漢以後）の碑文などのように筆で書いたものを、できるだけ忠實に筆法・筆意まで模刻するのとは同じくなかったと思われるだけである。ところが、秦の世の小篆も金文に似た裝飾的書體であるが、著者は、その筆畫のふとさが一樣である原因を「いま洋畫に使う繪筆のようなひら筆を使ってかいたこと」に求めた（五三ページ、また八〇ページにも再論される）。これも興味ある新說であるけれども、著者の論法をもって評すれば、ひら筆の古い實物が發見されるまでは、ただちに受け入れ難い。少なくとも旁證が必要だと思われる。これに對し、秦の度量衡の器に刻された銘文が、一行四字ずつの印の如きもので粘土に押しつけて作られ鑄造されたとの說は、首肯できるものである。これは後の印刷物の場合からの類推ではあろうが。

第二（B）は大體において前漢から後漢にかけての二百年間である（晉代の實物も存するが、數は多くない）。第五章と第六章に述べられる。今世紀に入って、中國西北の乾燥地域から出土した多數の「漢簡」によって、それまで名のみ知られていた木簡（および竹簡）の實物を見ることができ、研究がさかんになった。最近では、特に京大人文科學研究所での「居延漢簡」の共同研究は、新しい發

展をみせた。著者はその成果を充分活用しているから、第五章「政治の文字」における記述と議論は、ことに生彩がある。木簡の材料についても、しるされるし（七一ページ）、それを削る小刀のことも説く（同上）。だが居延と樓蘭で發見された漢代の筆の實物のことは最も興味をひく。著者は晉の崔豹の記載を引用して、この居延筆すなわち秦筆とし、鹿の毛で作られたとする。漢代の木簡は、鹿毫の筆で書かれたことになる（七七～八〇ページ）。漢代のふつうの書體は隷書（と今日ではよばれるもの）であった。著者は、「居延漢簡」の寫眞から、漢代の國境守備隊の書記役の習字に使ったと考えられる簡を見出し、隷書の特色の一つである破磔（字の右下の末筆のはねロ）の練習のあとをしらべた（九二ページ）。著者はここでは明言しないが、漢代の石碑などでよく知られる隷書の筆勢は、鹿毫の筆を用いることが然らしめたと考えるらしい。それが後の章（第九章）で提出される「北鹿南兎の說」へと展開するのである。

第六「印章」と第七「絹」の二章については、あとで述べる。第八から第十一までの四章は、著者の最も得意とする敦煌學の範圍であるから、生彩は一段と加わり、創見もまた最も多い。この四章は、さきの區分で言えば、第三（C）の紙の時代にあてられる。第八章「紙の出現」は西暦一〇〇年ごろの蔡倫の蔡明のことから始まるが、著者によれば、現存の世界最古の紙はロプノル附近出土のもので、特にその『李柏文書』であり、その日付は咸和三年（三二八年）である。別に敦煌附近で發見されたソグド語の文書があって、二世紀の物と考えられていた。「中國の印刷術とその西方への傳播」の著者カーターは、それに從っていた（T. F. Carter, The Invention of Printing in China and Its Spread Westward, New York 1925；一九五五年の新版がある。いま吳澤炎氏の漢譯「中國印刷術的發明和它的西傳」一九五七年、上海による）。藤枝氏は實物を調査し、その紙質からして五二八年または五三八年、北魏の末の物とする。我われは著者の目驗を信賴すべきであろう。

敦煌から出た寫本は漢文のものだけで、小さな斷片を含めると、數萬點に達する。日付の明記されたものから、四〇六年――一〇〇四年の六百年あまりの期間に書かれたと分る（一四九ページ）。その書體をみてゆくと、三世紀から四世紀までは隷書そのままの書體であったのが、「次第に柔らかな筆つきになり」「だいたい六〇〇年あたり」「隋の頃にいま楷書と呼ぶ書體が完成する。」この變化は、木簡を書くのに用いられた鹿毫の筆にかわって、崔豹のいう「今筆」すなわち兎の毛の筆が使われたためだと著者は言う（一五五ページ）。それは北朝と南朝の書風の相違のもとでもあって、筆の材質から論ずる限り、著者の「北鹿南兎の說」を首肯せざるを得ない。

ただ評者は、兎毫の筆は、先ず王羲之ら南朝の草書の體を生ぜしめたであろうと考える。草書はもっと古くから、單に早く書くための實用だけでなく、藝術として鑑賞されていたからである。もちろん藤枝氏が注意しておられるように（七七ページ）、漢代、まだ隷書の時代にも草體はすでに有ったのであって、ふつう章草とよぶ。破磔はなお隷書の風を存する。同じく鹿毫を用いたからであろう。それを南朝の人が兎毫を使って書くと、なだらかないわゆる今草、日本の草假名のもとになる書體となった。その形が南朝人の好みに投じたに違いないが、道具（筆）の材質が、書風の樣式の決定的要因であることは確かである。そして、やがて同じ兎毫で楷書をも書

くうちに、おのずからその筆に適した書風が生まれたのであろう。評者の臆測を述べるのは、この文の目的ではない。しかし本書を讀むひとは、藤枝氏の新説から、さらに數歩を進めたいと欲するであろうから、つい多言した次第である。

第六「印章」の章で、印章の起原が中國では極めて古く、殷代にさかのぼるため、當初は何に用いたか知られないという（九九ページ）。しかし漢代では木簡の文書をしばって封をする粘土（封泥）におしつけるのが印章の用途であった。この實例と解説は第五章と第六章に缺けている。一〇六ページに「封印した木簡」の圖版が載せられただけである。そしてすぐ漢印に朱肉をつけて捺すのは邪道であると言う。ここは、もう少し封泥そのものについての説明が欲しいところである。

なお西洋の學者は、古代の中東、スメルで印章は（圓筒であるが）やはり粘土におしつけて使うものであったから、中國の印章の使用法に、その影響があると説く（グロリエ「書物の歴史」大塚幸男譯、〈文庫クセジュ〉一七六、一九五五年、白水社、二五ページ）。この説を認めるかどうかも、一言して欲しいことの一つである。

第七章「絹」では、現存最古の絹に書かれた文字、紀元前四世紀ごろの「楚の帛書」についての話が多くの紙面を占めている。その叙述はおもしろく讀めるけれど、擴大寫眞を實見した著者が提出した、その字は木筆の類で書かれたのではないかとの疑問の答えはない。確かにむつかしい問題ではあるが、著者の論斷を聞きたく思うのは、評者一人ではあるまい。

第十章「古文書」にも注目すべき提言は多い。唐代古文書學は、そのほとんが敦煌などで二十世紀まで土中に埋もれていた反古紙、中國語でいう「廢紙堆」の調査の上に成り立つのだから、著者のいう如く「まるで考古學のような古文書學をやらねばならない。」いわゆる敦煌學はこのような綿密な作業を裏付けにして始めて強固な基礎の上に立つわけである。著者は中國で古文書學が發達しなかった原因を、古文書が保存されなかったことに歸する。そして保存されなかった理由は、前王朝の文書は無價値になったばかりでなく、それを所持することは、かえって危險でもあったからだという（一七一ページ）。これは大きな要因に違いない。しかし評者は、明代（？）以後ひろまった「敬惜字紙」の信仰がそれを助けたと考える。およそ文字を書きつけた紙は、そまつに扱ってはならず、ただ棄てただけではいけないのであって、一定の場所に集めて燒かなければならない。そうなると古文書の殘存する可能性は極めて少なくなる。ただし例外はある。古人または同時代の名家の筆跡・畫のたぐいであるが、このことは言うまでもない。

第十一章「新しい書物のかたち」で述べられた卷物から折本、冊子本への變化の様相は、いわゆる書誌學者にはよく知られたことであるが、多數の敦煌寫本の實物の調査にもとづく立言である處に強みがある。この章の「敦煌におけるペン書き」は最も注目すべき發言であって、漢字がそんな早い時代にペンで書かれていようとは、我われの想像しなかった所であった。そのペンの材質が木や葦であることも確かめられた。敦煌寫本の中に、ただそまつな走り書きだと言ってしまえない書風のものがあるのは事實だが、それはペン書きのためだったのである。

第十二章「漢字の周邊」は少し簡略すぎる。チベット字がインド

のデヴァナーガリから出たという如きは、恐らくインド學者に異議があるであろう。またトルコ字・ウィグル文字・チベット字などが、それぞれどんな筆を使って書かれたかについても、説明があるべきであろう。評者はむかし北京で蒙古人のラマからチベット語と蒙古語をほんの少し習ったことがある。そのラマは、チベット字をペンで書き、蒙古字は毛筆で書いた。そのペンで書くところを確かに見たのだが、竹筆だったか木（葦）であったかは注意しなかったため、記憶がない。これは著者はたぶん熟知しておられるであろう。たずねたく思う。

第十二章以下は印刷の歴史が述べられるが、第十四章で石刻と拓本の記述が挿入される。誰でも興味をもつことだが、印刷の起原、特に捺印から木版印刷に移る經過は、近年、天理圖書館を中心として行なわれた有名な百萬塔陀羅尼の印本がどのように造られたかの研究をふまえているから翔實で説得性がある。印刷の前段階というべき「印沙佛」などの記述を讀むと、印刷術が佛教、特に密教と深くかかわっていることが知られる。そこから評者は又一つの想像を禁じえない。道教もまた印刷術の起原に何らかのかかわりがあるのではなかろうか。佛教の護符に似たものを道教でも頒布する。その印本も案外に早くからあるのではないであろうか。そもそも朱泥（印肉）をつけて印をおすことは、道教で始まったのではあるまいか。評者にはこれを證すべき資料が今まだ無く空想にとどまるけれども、印刷術の發達には道教も一役買っていそうな氣がする。

宋元以後の刊本の話は、まったくあらましであるが、活字版の項は特におもしろい。宋代に畢昇が活字を考案したことは、「夢溪筆談」によってよく知られているけれども、その記載に從って、著者が陶磁印の專門家とともに試みた實驗では、泥の活字というものが（實は素燒のうちに字を彫り、さらに燒いて固める）、實用にはいろいろ不便があると分ったという（二六四ページ以下）。彫りにくそうな木活字が、かえって多く使われたゆえんである。また漢文の書籍の活字版で刷った本の實物は宋元時代のものは現存しない。今見られる最古の活字版本は十四世紀の西夏文字の佛典である（二七〇ページ以下。これは著者の發見であって、印刷の歴史の書物には載っていない）。この發見の端緒となった十年ほど前の一日、評者もたまたまその場に居合わせたが、（西夏文の「華嚴經」の數卷につき）「活字に墨をつけ、一々手で捺した」とあるのは、そののち精査の折に考えられたことであろう。評者の考え及ばぬ所であった。

著者の思い違いと想われる點がないことはない。たとえば「石經」の節で、石に儒教の經書を刻した最初である後漢の熹平石經について、「易經以下九つの經典」とある（二四二ページ）は何かのまちがいで、この石經は論語を加えても七種にしかならない（「周易」「尚書」「詩」「儀禮」「春秋」「論語」のうち、「春秋」は「經」と「公羊傳」を二つに數えて七つとなる）。誤植かも知れない。もう一つだけ擧げると、二五四ページの圖版九六に後漢書（京大人文科學研究所藏）の寫眞が「元版の一例」として出ているのは合點がゆかない。評者の實見したところでは、これは明白に南宋の刊本であり、海内の孤本というべき精槧である。もし何か元版と認めるべき證據があるならば、提示を希望する。これは單なる誤植ではありえないから敢えて一言しておく。

本書は初めに言った如く、文字と書き物を對象とした「文化史」

であって、考古學と古文書學および技術史を總合した新しい領域をひらき、創見に滿ちた著述である。叙述が平明である故をもって通俗書と見なすことはできず、學問的價値は極めて高い。一見して、はなはだ容易なような發言も、すべて著者の多年の調査と研究が背後に横たわっている。著者の學問（特に本書にあらわれる限り）については、羅振玉が王國維の「觀堂集林」に序して言った數語を移して評することができると思う。曰く「徵君（王國維をさす）の學、國朝二百餘年中に於て最も程易疇（瑤田）先生及び吳愙齋（大澂）中丞に近し。程君の書は、精識を以て勝り、而して目驗を以て之を輔く。……吳君の書は、全く近出の文字器物を以て言を立つ。其の源は程君に出でて、而して精博は則ち之に遜る。徵君は程君の學識を具え、吳君の軌躅に歩す。又た古文字古器物の大いに出づる世に當る。故に其の規橅は程君より大にして而して精博は吳君に過ぎたり。」程瑤田の學問について言われる「目驗」の二字は藤枝教授の場合にも適切なことばであろう。もしそれ東西諸國の文字語言に通ぜられる點に至っては、教授は王國維をふくめた諸家の上に駕して出づと稱することができる。この博通と精識に加え、多才多藝の著者であればこそ、本書は巨冊ではないが、その内容は「規橅大なり」と謂うべきものとなったのである。

（小川環樹）

中國近代化の經濟構造

横山　英　著

昭和四十七年三月　東京　亞紀書房
A5判　三一一頁

周知のとおり、戰後にめざましい進展をとげたといわれる明清史の主要課題の一つとして、所謂「資本主義の萌芽問題」があった。「資本主義の萌芽」という用語は中國からの借りものであるが、中國社會に對する停滯論的理解への批判と克服、一九四九年を頂點とする中國の政治的變革の歴史的性格の追求という目的意識をもって、一時期、かなりの成果をあげたことは否定できない。著者もまた、この學問的活況をうみだした研究者の一人であるが、その過程で、個別論文として發表された舊稿を基礎として成ったのが、本書である。その内容をうかがうのに便利であるから、はじめに、目次を掲げておこう。

緒言
第一部　清代の都市絹織物業の生産形態
第一章　研究上の問題點
第二章　生産組織の分析
第一節　生産諸形態
第二節　機屋の經營
第三節　元機屋と賃機屋